

## 中国国家資本主義の国家統合（要旨）

末 永 茂（いわき明星大学）

経済発展ないし成長過程で国家介入の形態が漸次変更されることは、不断に見られる現象である。その形態には、国家資本主義・国家社会主義・集産主義・全体主義・社会主義・共産主義・戦時共産主義・国家統制・軍国主義・開発独裁・官僚資本主義等がある。これらを「多様な資本主義」として、つまり時代的・地域的多様性と捉えるのか、あるいは、国家介入の段階的認識として、いわゆる異なった経済的政治的「体制論」として捉えるのか。これは、論者によって主義・主張は変わってくる。単なる国家介入の政策的問題として定性的・定量的分析を超えて、社会システムの根幹をなす相違、そしてそれらに対立概念として捉えるのか、否か。この問題は、結局は歴史ビジョンに係る問題でもある。本報告は主に中国経済のシステム分析を事例として扱いながら、これらの成長経済の成果と課題についてどのように措定するか、検討してみたい。

中国国家の歴史的本性は広大な「後背地」を有していることである。その「後背地」は、地理的・空間的にもそうであるが、それはより社会構造論的に立体的なものである。仮に、中国は如何に経済成長したとしても、少数例外的な西欧型民主主義を全面的に実現できるものではないだろう。なぜなら、中国はモザイク的で巨大過ぎるからである。そして、またそれが中国の存在を世界大に、させているのである。

国家資本主義論の概念論争を踏まえながらも、結局において、中国は自由な資本主義国家や分権的な西欧型＝中小規模国家であるよりも、大陸結合型の国家として、政治力学的に安定した国家を目指すべきであろう。市場経済システムは古代からの「バザール経済」に端を発している。つまり、これは都市交易の中で発達したシステムであり、市場の拡大は国内経済の全都市化現象や一極集中（EUのドイツ集中、我が国の東京集中）を招く。こうした高過密な集中は何をもたらすのか。国家は統治されなければならない。そして、巨大な人口圧の只中にあっても、国家の分解など有り得ない。従って、現時点では社会主義からの「過渡としての国家資本主義」論ではなく、「国家統合型システム」は如何にあるべきなのか、を議論されなければならない。

\*フルペーパーは「国家統合型経済システムの市場化」『いわき明星大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇』第2号(通巻)第30号) 2017年2月。

\*本要旨は上記論考の「はじめに」と「おわりに」の抄録